

制服も、生き方も、選び取れ！



「これからの女性の生き方など、女子学院では女子教育の最先端を学んだ」と玉蟲敏子さん

論があったが、玉蟲さんは「そんなに変わらないだろう」と予想した。「ふたを開ければ、思った通りだった」

女子学院時代の玉蟲さんは、都心という学校の立地を生かし、「街の中から生まれてくる文化を肌で感じた」。美術展に行くことが好きだった。

東北大学で日本美術史を学んだ。江戸時代の絵画の一流派である琳派、中でも江戸の画家、酒井抱一を研究した。尾形光琳、京都の画家の装飾性を受け継ぎながらも、江戸の代表的な花、アサガオを描くなど、「伝統を継承しながら、よく整理・理解して自分の世界観を表現している」と魅力を語る。

都内の美術館で20年あまり学芸員を務めた後、2001年から現職。日本美術史を教える。「日

本のいいところを踏まえつつ、グローバルな視点をお忘れなさい。抱一のようにうまく融合していく姿勢を若い学生たちに伝えていきたい。

東京大学理事を経て、現在、一橋大学大学院教授の江川雅子さん(76年卒)も、在学中に制服がなくなつた。学校側から「制服をやめます」と伝えられ、「あせんとした」。

同時通訳に憧れ、高3で1年間、米国に留学した。カリフォルニア州の小さな町で、ホストマザーは看護師をしながら子育てをしていた。「仕事をずっと続けたいと思つたのは、このお母さんの影響が強い」と話す。

東大に進学し、外資系金融機関への就職を経て米国ハーバード大学経営大学院でMBA(経営学修士)を取得。ニューヨークと東京で投資銀行に勤務後、ハーバード・ビジネス・スクール日本リサーチ・センター長などを務めた。



若い人には「自分の可能性を信じて、好きなことにチャレンジしてほしい」と江川雅子さん

自分で考え、行動に責任を持つという個人主義的な姿勢は「女子学院時代に確立したと思えます」。国際的な活躍をする素地の一つだ。また、キリスト教系の同校で「聖書」を学んだことで、「西洋文化のバックボーンが理解できました」。